船城地区地域史講座

歴楽 *FUNAKI*

新才　愛宕神社

鎮座地

・ふなき荘のすぐ背後に鎮座する神社です。
・「立石」という字名が示すとおり、かなり急な斜面に鎮座しています。

古記録

『自治会資料』より

・舟城神社の『神社明細帳』によると、祭神は「火迺賀具都知命ほのかぐつちのみこと(イザナギとイザナミの子で火の神)」である。

・創建年代は不詳だが、境内の石燈籠から見て、寛永年間(江戸中期1626～1644)と推定される。享保年間(1716～1736)とも伝えられている。

・境内の建物は舞殿(お堂)、拝殿、稲荷神社、天満宮、山の神である。

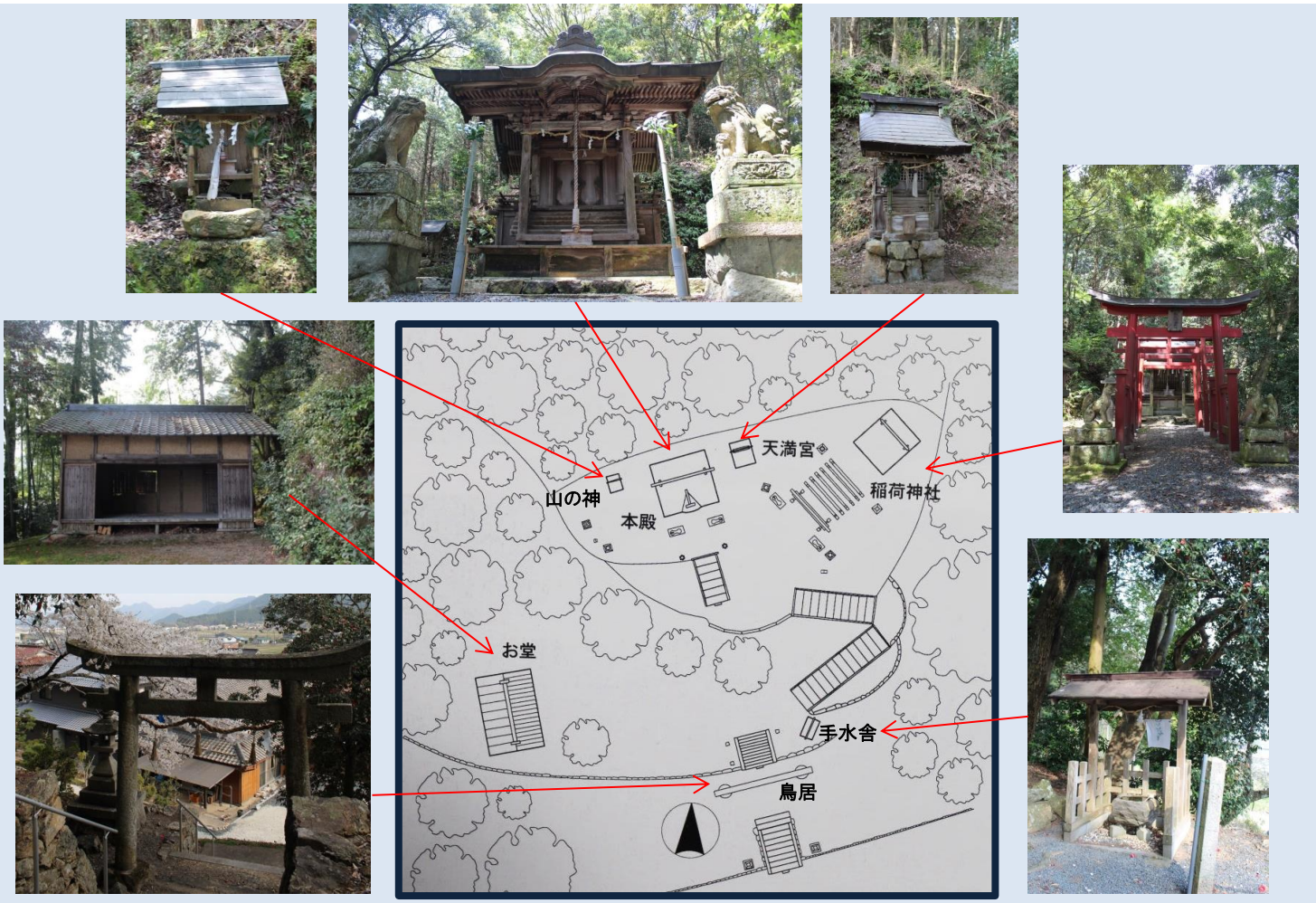
・毎年八月二十四日に愛宕祭、十月の第一日曜日にお頭渡しの行事、二月三日の節分には舞殿で餅まきがある。

『丹波志』氷上郡・巻之一・上

地蔵大権現　新才村

祭神
祭礼　七月廿四日
産神(うぶすながみ)
本社南向き　籠家(こもりや)二間三間　鳥居
東の方に社地凡(およそ)十間四方

『丹波志』が記された当時は「地蔵大権現」と呼ばれていたことがわかります。これは、愛宕神社の神様が、神仏習合の時代には、伊邪那美命(いざなみのみこと)を垂迹神とし、地蔵菩薩を本地仏としていたからで、神像としては、甲冑姿の地蔵菩薩が馬に乗る「勝軍地蔵」として表されます。



建造物の配置

『丹波市の歴史的建造物Ⅱ　春日町･市島町編』
（平成30年2月　丹波市教育委員会）図84 を改編

享保三年（1718）　本殿建立棟札

封　大梵天王　聖衆天中天
迦陵頻伽声　享保三戊戌年　本願　当村氏子仲
封

梵字（力）　奉造立當社愛宕大権現　諸願成就所　法主天王山胎蔵院快存　敬白

封　帝釈天王　哀愍衆生者
我等今敬礼　十二月吉祥日　大工　北油良村藤原朝臣
山本金兵衛
封

梵字（ボローン）

當村庄屋
臼井彦右衛門
同村鑰取（かぎとり）
冶左衛門

文政五年（1822）　花表（とりい）再建棟札

法主天王山覚王寺覚円
願主　新才村役人　喜兵衛
嘉七
世話人　喜右衛
村中　重兵衛
嘉平
市郎右
庄兵衛

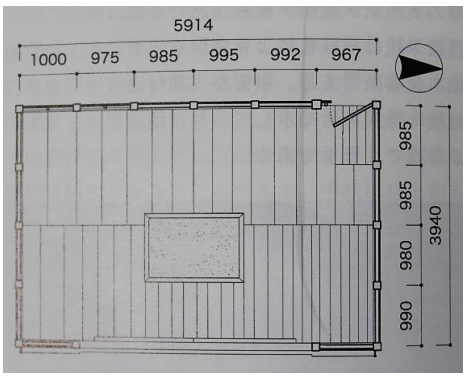
鳥居

―文政四年（1821）七月の銘が刻まれた明神型鳥居

鳥居越しに見る桜や椿、町並みや向かいの山も美しい。

お堂

―村の「お日待ち（籠り行事）」に使用された建物として



お堂平面図
『丹波市の歴史的建造物Ⅱ
春日町･市島町編』
（平成30年2月　丹波市教育委員会）より 図86

お堂は広場の西側にあり東面している。正面は中央間が広く、両脇側は壁とする。内部は板敷で、畳を敷くこともある。中央に囲炉裏があり、天井は貼らない。

…また聞き取りによれば、お日待ちの籠りに使用された。籠りの行事に使用された建物として重要である。

『丹波市の歴史的建造物Ⅱ
春日町・市島町編』116ページ

鳥居を入り、石段を上がると、広場の左手にる「お堂」。
桁行5．9m×梁間3．9m、　切妻造、屋根は桟瓦（さんがわら）葺

村の人たちが広間中央の囲炉裏を囲んで、一晩を過ごし、東に向いて開かれたお堂に、朝の光が差し込むのを待っていた、という状況が目に浮かぶようです。

本殿

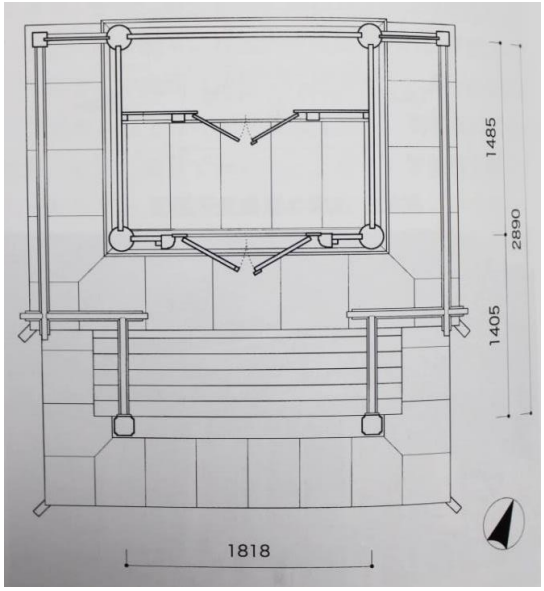
―享保三年（１７１８）建立

一間社流造　軒唐破風付　銅板葺
享保三年（１７１８）棟札　昭和二十六年（１９５１）改造

やや規模の大きい一間社流造である。
正面は幣軸構の板扉で、側面と背面は板壁である。
内部は奥行やや後方に扉を設けて、後方を内陣、前方を外陣とする。
唐破風の虹梁は、絵様は新しいが、連三斗（つれみつど）は当初のものであろう。
梁と組み物などの当初材には、鮮やかな朱の彩色が残っている。

この建物は、非常に大きい改造を受けている。
内法長押、切目長押、内外陣境の扉、妻飾の二重虹梁、桁より上の部材、縁、勾欄、脇障子、階、浜床、浜縁などが新しい。昭和二十六年の棟札があり、このときの改築であろう。
従って、当初材は柱などの構造材と組み物、妻飾の大瓶束・笈形・蟇股などである。
建設年代は、棟札により享保三年で、大工は北由良の山本金兵衛である。
主要な当初材は残っており、この地域の様式をよく示しており、建設年代、大工が明らかな点で、貴重である。

『丹波市の歴史的建造物Ⅱ春日町・市島町編』１１４～１１５ページ



本殿平面図
『丹波市の歴史的建造物Ⅱ　春日町･市島町編』
（平成30年2月　丹波市教育委員会）より　図85

連三斗（つれみつど）
外方に肘木を延ばして四つの斗をのせ、その肘木の途中を柱から出た肘木上の斗か木鼻上に置いた斗で支える 斗組の一種。

本殿の彫刻 ―新旧の彫刻が本殿を彩る

鳳凰

繋海老虹梁の
繰形付木鼻

頭貫木鼻のゾウ

正面

「柱を繋ぐ頭貫木鼻は象、獏とし、繋海老虹梁（つなぎえびこうりょう）の尻が正面側に出る木鼻は絵様、繰形付（くりがたつき）の木鼻とする点が面白い。目立つ部位なので、通例は獣頭となるところである。」

手挟の菊水

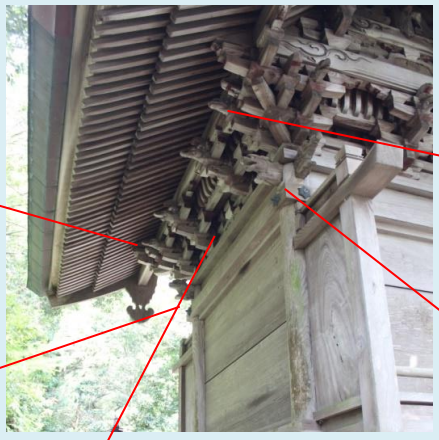
手挟の牡丹

「手挟（たばさみ）は、柱上のものが当初のものであるが、内側の軒唐破風菖蒲桁位置のものは、やや疑問である。」

向かって左側面

蟇股（かえるまた）の菊水

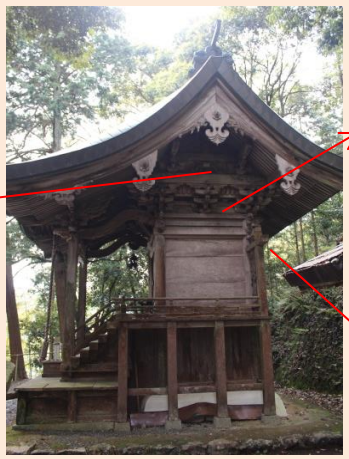
「頭貫と組み物の木鼻に施された獣頭彫刻が優秀である。」



背面

蟇股（かえるまた）の雲

龍の顔には彩色が鮮やかに残っていま



向かって右側面

蟇股の中央は地蔵菩薩を表す梵字でしょうか

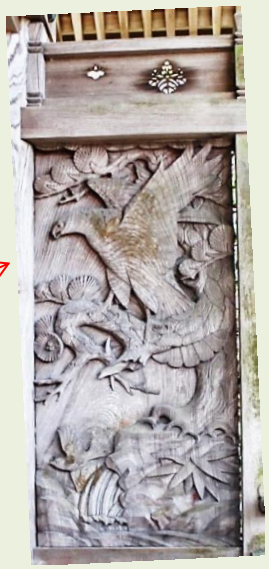
バク

扁額

「愛宕大権現」とあり神仏習合時のものと思われます。

脇障子

本殿改変時（昭和二十六年）のものとされています。



意匠は「松に鷹」です。勇ましい猛禽の姿が竹や水の流れとともに彫られています。

貴重な石燈籠などの石造物

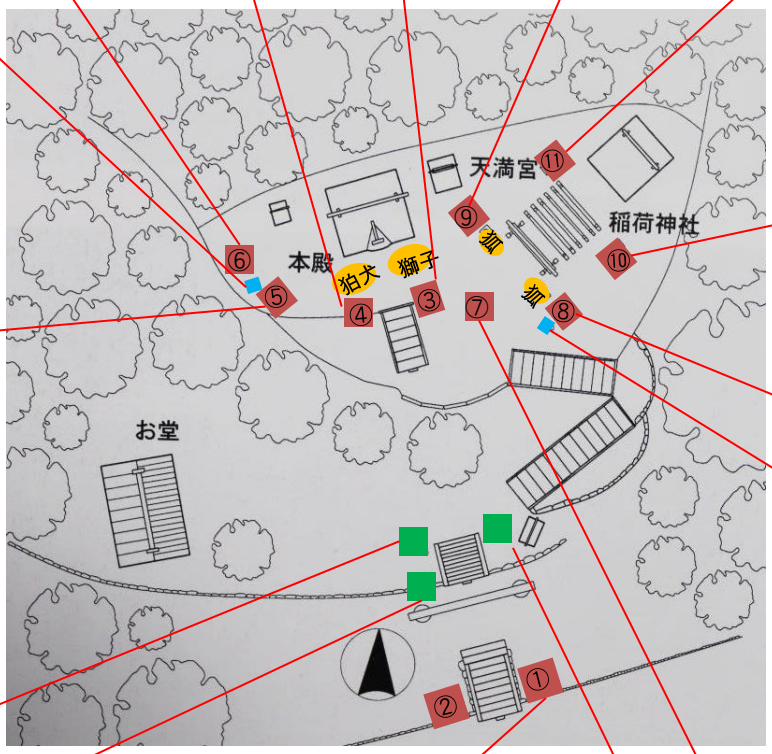
寛延二年（１７４９）

大正十三年（１９２４）

寛延三年（１７５０）

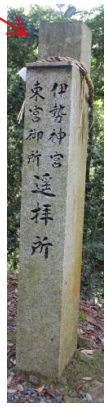
元文二年（１７３７）

元禄十二年（１６９９）
雩（あまひき）成就處



石燈籠、石碑、獅子狛犬などの配置
『丹波市の歴史的建造物Ⅱ　春日町･市島町編』

正一位稲荷大明神



愛宕山常夜燈
寛政二年（１７９０）

久下仙吉
畑中亀藏

一田四畝九歩　当区
大正八年十一月吉日　寄附　荻野勘兵衛

昭和十三年

荻野嘉七
同　増造

地蔵権現常夜燈
享保八年（１７２３）

獅子狛犬

―大正十三年（1924）奉納の来待石製

石材は、島根県の宍道湖の南岸で採れる「来待石（きまちいし）」。大きな鼻、垂耳、縦長の尾、台座の牡丹の花など、来待石製の特徴がよく出ています。ただし、口を開いた「獅子」が前足で子供を抱いているという意匠は珍しいものです。　大きさは、縦40×横60×高さ100㎝（台座含む）です。

親獅子の足元で微笑む子獅子

子獅子は小さいながらヒゲやタテがミもきちんと彫られていて愛らしい。

台石には奉納理由、奉納年、石工と寄進者の氏名が彫られている

獅子台石　正面
「初老記念」

獅子、狛犬各々の台石正面には「**初老記念**」とあります。「初老」とは「四十歳」のことです。

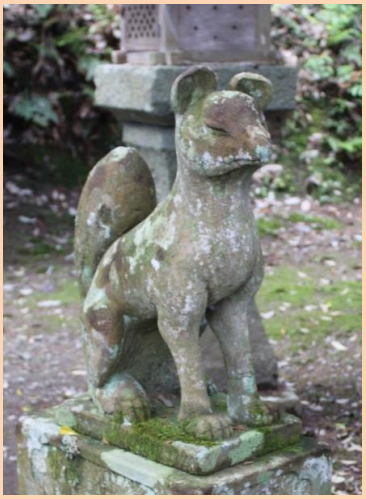
獅子台石背面には「**大正拾参年参月**　**石工**　**谷口由蔵**」、側面には「**寄進**　**荻野祥太郎**　**荻野信太郎**、**荻野辰次**」と刻まれています。

狛犬台座側面にも寄進者名が三名刻まれていますが、劣化が激しく「**■政**　**■■信一郎**　**■次郎**」などいくつかの

稲荷神社前の狐

―大正七年（1918）奉納の来待石製

台座には、「打ち出の小槌」や「巻物」、「鍵」や「如意宝珠」など、お稲荷さんに関わるものが浮き彫りで表現されています。



稲荷神社の赤鳥居の前の「神狐」の像も、獅子狛犬と同じく島根県で採れる「来待石」でできています。両側とも台石には「**大正七年一月　新才村中　世話人　梶村作太郎　久下秀二郎　荻野國太郎**」と刻まれています。

石燈籠

―「元禄十二年（1699）雨乞い成就」など貴重な石燈籠が十一基

p7図-⑤の石燈籠

棹正面から右回りに
（1）奉造立石燈鑢一座
（2）元禄十二年（1699）
己卯神合良辰
（3）（無地）
（4）雩成就處　新才村

※「雩」（音ウ、訓あまひき）とは「雨乞い」のこと。

p7図-⑦の石燈籠

棹正面から右回りに
（1）地藏権現常夜燈
（2）享保八年（1723）
（3）春正月吉日
（4）新才村中

とあり、『丹波志』に「地蔵大権現」と記されていたことが裏付けられました。

p7図-⑧の石燈籠

棹正面から右回りに
（1）愛宕山常夜燈
（2）寛政二庚寅年（1790）**正月吉日**
（3）（無地）
（4）當邑　世話人荻野六右衛門
念佛連中
と刻まれています。

新才　愛宕神社　境内石燈籠まとめ

p7図番号	奉納年月	（西暦）	正面銘	奉納目的	奉納者、願主など
①	昭和十三年　十月吉日	1938	献	**■■記念**	願主　荻野佐■郎
②	昭和十三年　十月吉日	1938	燈	—	
③	大正十三年　四月	1924	献	—	寄進　荻野秀市
④	大正十三年　四月	1924	燈	—	寄進　荻野関太郎
⑤	元禄十二年己卯神合　良辰	1699	奉造立石燈鑢一座	雩**成就處**	新才村
⑥	寛延二巳年　九月吉日	1749	奉挑御寶前	—	新才村
⑦	享保八年　春正月吉日	1723	地藏権現常夜燈	—	新才村中
⑧	寛政二庚寅年　正月吉日	1790	愛宕山常夜燈	—	當邑　世話人荻野六右衛門 念佛連中
⑨	寛延三庚午歳　孟春（正月）吉祥日	1750	愛宕常夜燈	—	願主戌年
⑩	ー　ー	ー	正一位稲荷大明神	—	當邑中
⑪	元文丁巳（元文二年）　中夏（五月）	1737	奉挑御寶前	—	

船城自治協議会　地域史講座「歴楽*FUNAKI*」資料

令和元年(2019)年5月18日

資料製作　山内順子

無断転載を禁ず